

吉由井古



かみす

古井由吉



平凡社

栖(すみか)

定価一、一〇〇円

一九七九年十一月十五日 初版第一刷発行

著者——古井由吉ふるいよしきち

発行者——下中邦彦

発行所——株式会社平凡社

東京都千代田区四番町四番地一  
郵便番号一〇二二 振替・東京八―二九六三九

電話(〇三)二六五―〇四五―(大代表)

印刷——東洋印刷株式会社

製本——株式会社石津製本所

© 古井由吉 1979

Printed in Japan

製本不良本はお取替え致しますので小社サービス課までお送り下さい(送料は小社負担)

栖  
(すみか)



目次

|     |     |     |     |    |   |
|-----|-----|-----|-----|----|---|
| 子   | 首   | 背   | 湯   | 肌  | 栖 |
| ⋮   | ⋮   | ⋮   | ⋮   | ⋮  | ⋮ |
| 233 | 189 | 145 | 105 | 59 | 5 |

装  
幀  
司  
修

栖





佐枝は東京にいた。祖母の四十九日の半分も待たずに、なにがしかまとまった金を兄夫婦から縁切りのしるしに受取って郷里の村を出て来ていた。

岩崎には、東京へ出たら、すぐにでも連絡して逢うつもりでいた。祖母の送りをすませたあと、兄姉たちとの口論に明け暮れた日々にも、岩崎のことを思っていた。水を冠ったのを機会に田畑を手離して金を分けあう思惑の兄姉たちにたいして、今度は兄嫁と一緒に死んだ親たちのことを言い立て、自分は二度と郷里へ帰らないと皆の前で誓って、とうとう押切ってしまった時にも、これきり東京へ出てしまうことについて、岩崎のいることを心の頼りにしていたという。

岩崎は佐枝からの連絡を、佐枝の祖母の四十九日まで待ち、さらに十日ほど膝をじわじわと抱えこむように過して、それからあきらめた。佐枝の祖母の息を引取った夜半に、佐枝と並んで月明りに静まった村の出水を見渡しながら、村の女と通じた墓掘乞食たちのくりかえし見た願望の夢を目覚めながらに見ているような空恐しさに背を撫ぜられた時から、東京へ戻ったあとも佐枝

の身体を想うたびに同じ背から脇腹へかけて走った陰気な慄えが、数日を境にばったり落ちた。あの女はやはり村に残った、とまた外を歩くようになった時には勝手に決めこんでいた。そして半年ほど前まで別な女と暮っていた部屋に、ひきつづき一人でずるずると居ついてしまった。まもなく就職もして二十五歳になった。

東京に着いてから佐枝は、このまま岩崎に逢ってはいけなないと考えなおした。このまま東京に住まいもなく身寄りもなしに岩崎を頼ったら、おそらく岩崎のアパートへ転がりこむことになる。相手はまだ学生の身分で、実家が東京にあつて両親も健在だという。それにまた拒まない人だから、身体からだを押しつけに行くようで、あさましい。郷里の連中にも、人に頼らず生きていきますと大見得を切ってきた手前、面目がない。いずれ一緒になるにしても、せめて自分自身の住まいだけでもしっかり決めて、すぐその晩からお荷物にならないようにしてから、逢っても遅くはない。

そう考えて佐枝は以前多少の貸しをつくっておいた女友達がやはり佐枝の知合いの男と同棲している部屋にひとまず寄せてもらうことにして、夜は台所のテーブルの脇に小さくなって眠り、こんな時でも襖一枚隔て二人が愛しあうのを控えないのに呆れながら、昼はあちこちの沿線の不動産屋を歩き回り、はじめは手頃であればいいとぐらいに思っていたのが、自分であれこれと注文がつくうちに真剣になっていた。

住まいさえしっかりしていれば、自分で自分の部屋に閉め出されるようなことさえなければ、

女ひとりでもたいいのことはしのげる、と以前の東京暮らしの行詰りにしみじみ悔んだことをすこしずつ思出すにつれ、貸間の貼り紙をにらむ目もけわしいようになってきた。自分の部屋へもどるのがつらいばかりに、友達の部屋を泊まり歩いて、困惑されているのを感じるほどにはしゃぎ立て、しまいいには口をきくのも面倒なほどくたびれて、男に眺められるままになっていたこともある。他人の部屋での朝の化粧は、身の置きどころもなかった。

郊外の学園町に見つけた新建ちのアパートの、まだ壁の匂いのこもる二階の部屋に小さな坐り机まで入れて、すっかり落着くまでに十日もかかった。家具は必要最低限にして、すべて新品を買った。以前の友人たちのところへ触れを回せば、結婚したり郷里へ帰ったり同棲に失敗したりした者たちの生活の残骸でもって、大半のものは間に合うはずだった。佐枝自身が一年ほど前に東京暮らしをいったん畳んだとき女友達へ譲り渡した家具一式のほうも、その友達がまもなく同棲に行詰ったようなことを村まで書いてよこしていたので、あるいは取りもどせたかもしれないが、とうに別れた後とすれば、家具はいずれあちこちへ散らばって、回り回っているはずだった。それに以前のような、間に合わせの暮らしは、もうしたくない気がした。

勤めのことはこの先長い長いことなので腰を据えて探すことにして、ようやく岩崎と逢えるところまで来たと佐枝は思った。そして財布の底に小さく折って藏っておいた住所のメモを取出して、手紙を書こうと机に向かった。一人で立てた手柄を見てもらいに行くように胸がはずんできた。

柄

机の上に白く、水のように流れる秋の暮れ方の窓明りが、目の芯につらくこたえるのを佐枝は訝っていた。スタンドをつけようとして、はっと胸もとを押えた時には、もう間違いないと感じた。村はずれの乞食小屋の、岩崎の腕の中で、日数のことをちらっと考えはした。しかしまともに数えもせず、祖母の命があと何日もつか、とそのことばかり気にかけていた。二度きりの関係だった。そのあとは、出来事がつぎつぎに重なって、自分の身体を意識する暇もなかった。

日の暮れきるまで、佐枝は机のへりにみぞおちをかるく押しあて、息を殺すようにして、暗がりに目を光らせていた。二年前と同じだった。男は打明けられた時には、まるで産ませるつもりのように優しくかったが、おいおい気むつかしくなり、自分からしかけた大喧嘩の末に佐枝の冷やかな言葉を質に取って、俺の子なものか、とほっとしたように離れて行った。産むのなら証しも立てられるけれど、おろすのならどうにもならない、と佐枝も後を追わなかった。そのうえ医者とも喧嘩になり、お世話になりませんと叫んで診察室を走り出た。三日三晩、物も思わず、部屋に閉じこもっていた。それから軽い出血が始まった。それでもまる一日こらえて、夜になってから身体を拭き、化粧もして別の病院へ駆けこんだ時には、目の前が暗く狭くなっていた。一年経っても、心身ともに完全には回復しなかった。あんな状態でなかったなら、いくら兄に優しい言葉をかけられても祖母の看病に郷里へ帰る気にはならなかった、岩崎にも出会わぬところだった。暗がりに祖母の顔が浮んだ。うっすらと笑っていた。ハカホリ小屋と、露骨なほうの呼び名が耳の奥でたっぷり響いた。昔ながらに墓掘乞食の背に負われて川向うの窪地へ渡されることをあ

れほど願っていた、若い日にはほかの娘が墓掘乞食の子を孕んだら自分は抱かれてもいないのに腹が大きくなった、あの祖母でさえも、小屋のことを口にする時には、今から思うと、妙な薄笑いを唇の隅に浮べていた。女の、女にたいする侮蔑が今では感じられた。

目がくらんでいたな、と佐枝は祖母の薄笑いを払いのけ、立ちあがって電燈をつけた。部屋の中が急に空虚に、見知らぬ場所のようになった。

「でも、お祖母ちゃんのは思いこみだったけれど、あたしのは、ほんとの妊娠なのよ」

二声だけ、佐枝は囁りあげた。そしてまた心を立てなおし、岩崎の住所を破り棄てた。前の男も佐枝に打明けられると腰を落して、背をまるめ、暗い目つきでしばらく膝揺すりをしてから優しくなった。あれは二度と目にしたくない。

このひと晩をどう過すか、ひとりで夕飯の支度をして、ひとりで静かに食べ、ひとりで静かに眠れるか、すべてはそこにかかっている、あとは同じことの繰返しだと思った。

「あれは、村のことなんです。村の女の、気狂い沙汰なんです。それを、東京まで出て来て、あなたのところへ持ちこむなんて、あさましいようです」

まる二年半、佐枝は岩崎に連絡をよこさなかった。

病院では前の時にくらべれば心身ともに落着いて、まる半日、病室の天井にひとすじ細く走る罅をいとおしいような気持で眺め、それから手術室へ呼ばれ、吐気を覚えて病室で目をひらいた時にはすべてが済んでいた。夜更けにアパートへもどるまでにもうひと眠りした。来る時に降っ

ていた雨はすっかり上がっていたが、傘も忘れずに持って帰り、台所にひろげて乾した。

三日ほど自分の部屋で寝ている間、考えたことはもっぱら郷里からここへ戸籍を移すことだけだった。郷里の家には、その夏まで、ひとつ家に三つの戸籍があった。ひとつは兄夫婦たちの、ひとつは祖母一人だけの戸籍。もうひとつは佐枝だけが残された戸籍で、死んだ親たちも、結婚した五人の兄妹たちも斜線で消されているが、筆頭者は死んだ父親となっている。二十一の歳にはじめて男を知り、後から思えばおかしなように結婚を焦った裏にも、まるで故人の籍みたいな、自分一人のために故人が往生できないみたいなの、そんな戸籍から早く抜きたい気がはたらいていた。結局そういうことだったのよ、と関係の壊れたあとで別な男に話すと、馬鹿だね、それならなにも結婚まですることはない、と笑われた。自分一人の戸籍なら簡単につくれる、むしろから謄本を取り寄せてこちらの役所へ放りこんでおけばいい、住民票と変りゃしないと言う。拍子抜けして、それ以来、分籍のことは忘れていた。

中断していたことを続けるぐらいの気持で、佐枝は自然にまた考えていた。たいして意味もない手続きだが、それでも一人だけ残った自分が抜ければあの戸籍は抹殺されてしまう、死んだ親たちの名は子供たちの戸籍に残るだろうけれど、祖母の名は、死んだばかりなのに、どこからも消されてしまうのだろうか、とそんな埒もない考えばかりで、昔のような気負いも哀しみもなかったが、型の上でも郷里から離れよう、一人になろう、という気持は固まって行った。

しかし一週間ぶりに外へ出てみると、十九の歳から歩き馴れたはずの東京の街が、見も知らず

の土地と感じられた。行きかう人間たちの姿も、それまでは郷里と比べればどんなに気楽につきあえることかと眺められたのに、薄膜一枚隔てたようで、あの人たちはどんなことで笑い、どんなことで怒るのか、見当もつかない。気がついてみたら、自分の歩き方もどことなく覚束ない。足がすこし長くなったみたいで、実感の薄れた暮しの馴れを、首をかしげながら、なぞっている。来た覚えもないようなところを、勝手知った顔でずんずん先へ行くかと思うと、曲り馴れた角を、ああここだなとつぶやきながら、通り過ぎてしまう。

さすがに心細かったのか、佐枝は一時期、もうつきあうまいと思っていた以前の男友達をかわるがわる電話で勤め先から呼び出すようなことをした。しかし久しぶりに男たちと向かいあってみると、また思いがけないことがあった。今までは人と話すのにそれほど気遅れを覚えるほうでもなかったのが、相手の話にならず、なにか呆然と遅れるようになっていた。ふとしたはずみに相手の言葉が頭に入らなくなり、しっかりと聞こうとすればするほど、唇の動きのようなものが目についてしまう。それであわてて相槌を打つものだから、いたずらに相手の意を迎えることになり、相手のお喋りに火をつけてしまう。自分が話す時には、それを自分がまた端からはらして見ているふうで、いきおい物静かな、心のこもったみたいない口調になるのだが、その最中にいきなり、口から出まかせを言っているように声がいくらか甲高く、浮足立って走り出す。

実際に、気持はますます沈みがちなのに、口からは出まかせを言っていることもあった。それよりも我ながら気色悪いのは、相手が勢いこんで押しつけてくる言葉を、べつに共感したわけ



もないのに、まるで自分自身の感慨みたいに、しみじみと鸚鵡返ししていることだった。しまいには、かならずと言っていいほど、そうなった。

三人目に会った男が、別れぎわに、身体を求めた。呆気に取られて顔を見ると、ごく自然な成行きであるような、今までにお互いにそれだけの気持の経緯があったような、潤んだ笑みを向けていた。思わず昔の自分にもどって、手ひどく撥ねつけた。しかし部屋に駆けもどって言いようのない疲れの中に坐りこむと、この前の男にも、そのまた前の男にも、無言のうちに同じように求められていたことにはまさら気がついた。

確かめるようなつもりでもう一人の男を呼出してみると、その男も求めた。

あたしたちの仲間はそういうつきあいじゃなかったでしょう、と佐枝は突放した。すると相手こそ心外そうな目を見はり、君は自分自身にたいして正直でないと佐枝を詰り、こういうこともあった、ああいうこともあった、とお互いの気持がどんなに深かったか、そのしるしをはてしもなく数え立てた。

また逃げ帰った部屋の真中に佐枝は坐りこんで、ひとりうなだれるというよりは、首を前へ低く伸ばして、畳の目を見つめていた。

自分のほうが、変ったらしい。たしかに物腰や物言いに、あいまいなどころが出て来ている。

思わず後へ引きながら相手の意を迎える。どの男たちもまた東京へ舞いもどってきた佐枝の暮しを心配して、なにか仕事を見つけてくれるようなことを、親身に言ってくれた。以前にも、佐枝